

# IPU・35



ウイグルからの留学生。

女性が身にまとう、あざやかな民族衣装が「アットラス」です。また、男性が着ている刺繍つきのシャツは「カンワイ」と呼ばれます。左から、アブラジャン・ンマイさん、バイマ・アハドラさん、アブラ

ジャン・アブドレシティーさん（いずれもソフトウェア情報学研究所）。はるか昔、シルクロードを介して東西の文化が往来していた西域。その一角を占める、新疆ウイグル自治区から来た皆さんです。



## キャンパス 彩

### ハマナス

実を噛んでみると、まろやかな甘酸っぱさ。つぶつぶの、種の感触も残ります。バラの仲間なので、うっかり近くと、トゲに刺されます。調整池に近い、東側の外周路にて。

## IPUFesta通信②

思いは、ひとつ。

夏休みの8・9月にも、準備は着々と進行。パンフレットの下準備集めが快ペースでした。広報部が内容をチェック、印刷を経て10月中旬には納品です。営業部のメンバーの頑張りで、広告枠を完売。レギュラーならびに新規の sponsor 様、ご協力、ありがとうございました。ミーティングを重ねたり、ステージの仮組やリハーサルを済ませたりすると、だんだん開催が近づくと実感します。10月に入ったら、PR活動も頑張りたい。

第10回 岩手県立大学 大学祭  
IPU Festa 2007  
10月27日(土)・28日(日)  
●アーティストライブ  
●IPU-Festa-Model  
●岩手大学・盛岡大学・富士大学とのコラボレーション  
…ゴミ削減活動・赤い羽根共同募金  
●その他、模擬店・ステージイベント・打ち上げ花火など

## すこやかタイム ～安らぎのリラクゼーション～

もともと備わっている治癒力に働きかけ、健康を維持したり高めたりするために。心あたたまる交流を通して養生や、リラクゼーションの方法を習得する機会です。

対象 ●「がん」の告知を受け、療養生活を送る方。ならびに、その方をサポートする家族・友人など。  
日時 ●10月21日(日) 11月18日(日) いずれも13:30～16:00  
場所 ●いわて県民情報交流センター7階 岩手県立大学アイーナキャンパス [学習室1] ※予約なし・無料で参加できます。  
■問い合わせ先  
岩手県立大学看護学部 講師/石井 真紀子  
Eメール/ishii@iwate-pu.ac.jp TEL/019-694-2270

## 滝沢キャンパス講座

### 平成19年度の公開講座

さまざまな知的関心に応え、多彩な教授陣が専門性を活かして興味深いテーマを取り上げます。

#### 10月6日(土)

- 教養講座 [B-1] 「個人認証について：現状と課題」ソフトウェア情報学部 准教授/バサビ・チャクラボルティ
- 大学院特別講座 [C-1] 「犯罪被害者のこころのケア～私たちの“安全・安心まちづくり”～」社会福祉学研究所 講師/中谷 敬明

#### 10月13日(土)

- 教養講座 [B-2] 「子ども虐待を防ぐ力とは～虐待を認めない地域社会作り～」社会福祉学部 准教授/三上 邦彦
- 教養講座 [B-3] 「映画におけるリアリズムの構造～映画の起源から現代ドキュメンタリー映画まで～」共通教育センター 准教授/熊本 哲也

#### 10月20日(土)

- 教養講座 [B-4] 「半導体のできる～ナノからテラヘルツへ～」研究・地域連携本部 教授/倉林 徹
- 大学院特別講座 [C-2] 「文学とコンピュータ～モノガタリを組むを探る～」ソフトウェア情報学研究所 教授/小方 孝

#### 11月10日(土)

- 教養講座 [B-5] 「言語を科学する～日本語とはどのような言語であると言えるのか～」共通教育センター 講師/高橋 英也
- 大学院特別講座 [C-3] 「東北における平成の市町村合併とは何だったのか～行財政の役割を問う～」総合政策研究科 講師/栗田 但馬

#### 11月17日(土)

- 教養講座 [B-6] 「“細胞死”の現象と、その意義について」看護学部 准教授/似鳥 徹
- 教養講座 [B-7] 「日本と国際関係～日本の進路を探る～」盛岡短期大学部 教授/吉原 修
- 12月1日(土)  
■教養講座 [B-8] 「デジタルメディア論入門 通信の歴史～アナログから地上デジタルテレビまで～」総合政策学部 教授/吉本 繁壽
- 大学院特別講座 [C-4] 「Evidence-Based Nursing (根拠に基づく看護)は患者に何をもたらすのか？」看護学研究所 講師/井上 都之

- いずれも無料。どなたでも受講できます。
- 講義時間/13:30～15:30
- 岩手県立大学 [滝沢キャンパス共通講義棟]

#### お申し込み方法

※ハガキかFAX、または電子メールで。  
※希望する講座の番号・氏名・年齢・性別・住所・電話番号・これまでの受講の有無を、お知らせください。  
※各講座とも、開催の5日前まで受け付けます。 ※同じ日に受講できるのは、1講座です。

#### お申し込み・お問い合わせは下記へ

【岩手県立大学 研究・地域連携室】  
TEL/019-694-3330 FAX/019-694-3331  
電子メール/kouza-07@ml.iwate-pu.ac.jp

## 編集後記

岩手県立大学は開学してから10周年です。“これまでの10年”は開学、大学院設置、公立大学法人化等、皆様のおかげで多くの成長をすることができました。開学10年ということで、さまざまな行事を予定しております。ぜひ多くの皆さまにご参加いただいで、“これからの10年”をスタートする岩手県立大学をご覧いただきたいと思ひます。

(斎藤)

## IPU・35

発行/2007年9月28日

公立大学法人

岩手県立大学

経営企画室

〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子152-52

TEL/019-694-2005 FAX/019-694-2001

URL/http://www.iwate-pu.ac.jp/e-mail/management@ml.iwate-pu.ac.jp

# また来る日まで

大連からの留学生に修了証  
…来春には博士前期課程へ



中国・遼寧省から迎えていた留学生の修了式が、7月31日に行われました。国際交流協定を締結している大連交通大学との学生交流は、着実に実を結んでいます。



ソフトウェア情報学部の特別聴講学生として探究に励んだのは陳実(チン・ジツ)、李思瑤(リ・シヨウ)、梁良(リョウ・リョウ)、馬欣(マ・キン)、康偉(コウ・イ)の皆さん。修了証を手渡され、挨拶に立った梁良さんは「かねてから興味があった専門分野の講座で、充実した時間を過ごすことができました。言葉や文化的なバックグラウンドの違いを超え、あたたかく迎えていただき感謝の思いが尽きません。冬を乗り切るための灯油の買い方を教えてもらうなど、学業のみならず生活面でのアドバイスも心に残っています」と、キャンパスライフを振り返りました。

この5名は母国へ戻った後、来年の春に再来日。ソフトウェア情報学研究所博士前期課程で、あらたなスタートを切ります。

## 質問と 話法の基本を学ぶ

ピア・サポーター志望者の研修会

仲間や同輩(Peer)として、学生が学生のために。さまざまな悩み事や相談事を聞いてあげたりアドバイスしたりするサポータールームが、10月に開設されます。これに先立ち、ピア・サポーター活動に関心を寄せた学生が研修に臨みました(8月4日)。

支え合いのコミュニケーションを育もうと意欲的な面々。さらに、ピアカウンセリングを実践しているサークル「ピアいぶのメンバー」そして岩手大学からの2名も。講師は、広島大学保健管理センター・内野慎司氏です。

まず「ピア・サポーター活動とは何だろうか」という問い掛けや概説に始まり、その基本的な問題解決技法と実施効果、現場における課題などについてレクチャーが行われました。広島大学での実践例は、具体的に示唆に富むケーススタディと言えるでしょう。



次いで自己紹介、他己紹介、小グループでの共同作業などを経て、援助的コミュニケーション・スキルのトレーニングへ。相談者、相談を受ける人、観察する人、というように仮定の場面を設定して具体的なやり取りを試みるなど、対話の基本を学びました。

この研修を経てピア・サポーターに正式登録される学生へ、委嘱状が交付されます。

## 表紙の人に 一問一答

- ①在籍先 ②留学の目的 ③研究テーマ
- ④ウイグル語で好きな言葉
- ⑤日本語で好きな言葉 ⑥将来の希望



アブラジャン・シマイさん

- ①ソフトウェア情報学研究所・博士前期課程/2年【伊藤I研究室】
- ②音声認識技術を学ぶこと。その成果を活かし、ウイグル語のタイプライターを作ること。
- ③音声の基本的特徴量を用いたウイグル語音声タイプライターの研究。
- ④「チンデルラビン(お楽しみに!)」
- ⑤「ガマンする」
- ⑥研究者。後進の指導にも励みたい。



バイマ・アバドラさん

- ①ソフトウェア情報学研究所・博士前期課程/2年【船生研究室】
- ②新疆工学院で専攻した機械工学をベースに、福祉の情報化システムを研究する。
- ③高齢者のための「グローバルぬくもりネットワークシステム」の構築
- ④「自信があれば、山も互障に」…己を信じて取り組めば、きっと良い結果が訪れる。
- ⑤「がんばって」など、人を励ます言葉
- ⑥多くの人々に活用されるネットワークシステムを、ウイグル社会に広めていこう。



アブラジャン・アブドレシティーさん

- ①ソフトウェア情報学研究所・博士後期課程/2年【伊藤II研究室】
- ②すぐれた日本の技術をウイグルの発展に活かすため。
- ③脳血管障害の診断支援(コンピュータグラフィックス)
- ④「アルハンドリラ」…どんな時でも神様に感謝すること。
- ⑤「まじめ」…前向きに努力する精神が感じられるから。
- ⑥専門的に学んだ成果を母国に定着させたい。国際的な視野で、日本との懸け橋も務めたい。

私たちのふるさと、新疆ウイグル自治区。その中心都市・ウラムチへ、北京から約3700km。シルクロードの天山北路の要衝です。ウイグル族のほかカザフ族、タジク族、キルギス族などが暮らす多民族社会でもあります。雪山、砂漠、草原などが織り成す雄大な大地が広がっていますよ(バイマさん談)。



## 汎用モデルも広めたい

社会福祉学部が取り組む  
「コミュニティーカウンセラー教育  
・研修プログラムの開発・実施」

社会人の再教育、キャリアアップに向けて文部科学省が行う「平成19年度 社会人の学び直し」

修プログラムの開発・実施」が採択されました。民生委員・児童委員といった地域福祉に携わる人材が対象です。家庭や社会でのトラブルの増加、内容の深刻さ・複雑さゆえに極めて難しい対応を余儀なくされています。また、個人的に培ってきた経験や見識に頼りがちな相談業務から脱す必要性も叫ばれています。そこで、コミュニケーション・スキルや相談技法が高まる勉強のコンテンツと機会を提供しようというものです。心理学、ソーシャルワークなどの知見に裏打ちされた内容に取り組むことで、コミュニティーカウンセラーとしての資質向上が図られます。

## 現場のニーズ社会背景を捉え、コンテンツづくりに着手する

プログラムの利用価値を高めるには、汎用モデルとしても通用するコンテンツのラインアップと内容を充実させなければなりません。印刷物を作成して配布する、あるいは電子化してeラーニングや遠隔授業への活用を図るなど、選択肢は広がります。コース別の履修体系づくり、資格認定との関連付け、といった付加価値の追求も視野に入れます。受講生の募集、さらにシンポジウム開催なども具体化していく一連の取り組みは、3年間に渡る、文部科学省の委託事業です。

## がん看護のCNNS育成も

文科省採択テーマは  
「北東北における総合的がん専門医療人の養成」

看護学研究科が秋田大学・弘前大学・岩手医科大学と共同申請したプロジェクトが、文部科学省の「平成19年度がんプロフェッショナル養成プラン」に採択されました。地域医療の現場を担う人材の養成をメインとする教育・研究拠点の拡充を進めていくこと。ならびに、体系的なカリキュラム編成に基づいて実践的な指導の展開を図っていくこと。こうした点が、同プランの目的です。

## 4大学の共同プロジェクトで、看護学研究科が進めること

それぞれの大学が特質を活かせる取り組みを重ね、その成果を共有していくためにマンパワーの連携、広域的なネットワークづくりを掲げます。化学療法放射線療法、緩和ケアの3コースと、臓器別がんの横断的なカリキュラムを組み合わせ、海外の現場にも目を向けて研鑽の機会を設けるなど、臨床

と研究の両面で優れた専門性を発揮できる医師・コメディカルを養成していきます。

また、地域の医療機関・研究機関などとの協力体制は、がん医療に取り組むコンソーシアム形成への第一歩。きわめて高いレベルと言われる。北東北のがん死亡率。その低下に向けて着実な歩みが記されます。

こうした枠組みの中、看護学研究科では「がん看護」に関するCNNS「専門看護師」の育成へ乗り出します。博士前期課程に「がん看護CNNSコース」を開設。チーム医療と全人的ケアを、より高いレベルで学ぼうと志す看護職者を受け入れる方針です。



「楽しみながら腕を磨こう。あと、インカレなど対外試合では勝利に向かって頑張ろう」

そんな気持ちが以心伝心。主将は久保太毅さん(総合政策学部2年)。気の置けない仲間が、週3回の活動日に集合です。息を静めて弓を引く。集中力を高めて放ち、的を射抜くと「よし!」と響く掛け声。弓道というスポーツで重視されるのは骨法(フォーム)と筋力とのバランス、相乗作用とか。はかま姿に着替えたら、神前礼拝に始まる練習。静寂に包まれ、気が引き締まります。古式に則り、初心者も有段者も型を追求したり心身の練磨に努めたりしています。

## サークルで 元気者

●弓道部  
笑いも忘れず、心身練磨



盛岡短期大学部 国際文化学科  
じぶん・地域・世界は、  
つながっている。



### 学ぶことが楽しくなる空間

英語の書籍、文献、CD、DVDを思い思いに手に取る学生がいる。パソコンを使ってプロ仕様のビデオ編集ソフトを使いこなす姿も見られる。洋書を読破していくリーディング・マラソン、英語の聞き取り能力を高めるリスニング・マラソン、さらにオリジナルで撮った動画に音声を入れたりテロップを入れたりする作業など、自主的なメニューで英語と接するスポットが活用度を上げてきた。

### 誕生、GP推進室

この春、短期大学部棟3階で本格運用が始まった「GP推進室」。コミュニケーション・プレゼンテーション・情報処理のスキル習得と連動し、グローバルな言語である英語の運用力アップを多面的に図れると好評だ。

自己理解・自己表現を基盤に  
さまざまな文化との共生、  
異文化コミュニケーションへの  
視点を統合する教育プログラム。

お互いの理解・共感、そして共生をキーワードとする異文化体験で確かな動機を養う。また、さまざまな場面で臆することなく意思や情報を、さらには自文化を発信するための方法を身につける。地域



GP推進室は、平成18年度の「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)／文科科学省」に採択された教育事業の一環として設置された。GPとは、Good Practice「グッド・プラクティス」優れた取組」の意味だ。

【自他の文化理解を柱とした国際文化教育／コミュニケーションスキルを育成しながら】が採択テーマ。学生を主体に、学科教員が連携して総合体験型教育を追求するプログラムは、わが国の高等

教育の活性化とレベルアップにも活かされる。

### 地域文化、日本語の学習も

アメリカまたは韓国を訪れるプランも盛り込んだ「国際文化理解演習Ⅰ・Ⅱ」。日本(地域)とアジア圏、そして西洋の文化を横断的に学ぶ「地域文化理解演習」 「文化と思想」「文化研究法」「社会論」などの科目群。さらに、日本語の運用能力や自己表現力を高めるプログラムも充実し、広く世界を指向する実践が深化しつつある。



どんな未来を創ろうか。  
ピュアな感性と探究マインドが  
「理論指向の現場主義」を支え、  
社会との接点は深まってゆく。



### 実践的なテーマを抽出

ユーザの視点だと、どんな使いやすさが望まれているのか。テーマ意識を高め、めざすのは、たゆまざる現場感覚に裏打ちされた情報システムのフロンティア。

「ソフトウェアのエジソンになろう」。船生豊教授が率いる研究室のキャッチフレーズだ。必要は発明の母、という考え方に基づく、さまざまなニーズを抱える現場と向き合い、問題解決の方法を実践的に構築していくことになる。

医療・福祉・教育・農業・行政、そして産業界など、船生イズムが連携を深めてきた分野は多岐に及ぶ。生活環境、産業界の高度情報化という観点で社会の進歩を指向する。



### 新しい、価値ある方法論

グループゼミは三つ。システムの方法論と活用レベルへ焦点を当てて、包括的な探究に取り組むのが「開発手法ゼミ」だ。エンドユーザ自らがシステムづくりに参加、運用や管理までも行うエンドユーザ・コンピューティングが象徴的な対象である。世界的に注目される、フォーマルな手法を用いる開発方法論によるシステム環境の具現化にも意欲を燃やす。

### フィールドへ飛び出そう

少子高齢化、生活習慣病の増大といった社会の動きと対峙しているのは「ライフレポートゼミ」。そのシステムが必要とされる現場の声を捉え、要求分析に活かす。自治体のプロジェクトに参画したり、社会福祉学部など他学部と学際的に連携したり。開発力もさることながら、トータルな意味で、にんげん力を発揮して社会との接点が深められる。

また食育活動を支えたり、地場産品のブランド化に貢献したりするのが「食農ゼミ」。小学生と栄養士と農家とが交流できるWebサイトの立ち上げ、産直と都内アンテナショップのオンライン化など「役に立つ」システムへ頭脳が集約される。



ソフトウェア情報学部 船生研究室  
情報システム構築学講座)  
システムに宿るのは  
にんげんらしさという真理。

### 先輩が、お手本だ

学部生と大学院生が集まる全体ゼミは先輩から後輩へ、学習のコツや体験談が伝授される機会でもある。

「文献チェック、レポート作成は午前中が良いかも。僕の場合、プログラミング作業は午後に。休憩時間には、英語論文を読むようにしよう」

と、具体的なアドバイスも出る。2人で1台のコンピュータを使う、ペアプログラミングが奨励される。各学年の混成チームで進むシステム開発。自立した個々人が意思疎通を図り、結束力も高まっている。





教職めざす、すべての学生と語りたい。

共通教育センター／教授 松本 裕司

学校経営に関する記録や各教科・訓育の指導案、さらに子どもたちが綴った文集など。全国あちこちに遺されてきた数々の教育資料は、未来への手がかりを得るための貴重な拠りどころだ。ひも解けば、さまざまな実践の理論体系が明らかにになり、時代背景との関連性を検証できる。また、それらの今日的な意味や示唆する内容を確かめられる。

明治期から戦中、どのような教育政策が行われたのか、と歴史に学ぶ意義も大きい。松本先生が唱える教育方法史研究という視座は現場への目線を絶やさず、多様な教育観に対する探究心で貫かれる。

「進路として教職を考えている各学部の皆さんに、それぞれの問題意識を育むよう求めたい。解釈の方法も答も一様ではありません。感じたこと、捉えたこと、認識したことを、ロジカルに自らの言葉で伝えてほしいのです。そういうトレーニングが、教員へのモチベーションを高める一助となります」

学問の純度、深度を追求する姿勢を熱く説く一方で、松本先生は「学生のニーズと意欲に応え、より充実したカリキュラムでキメ細かな指導を重ねていこうと期しています」と、教員養成への意欲を示す。

熊本の出身で、昨年4月から本学で講じる。東北の教育資料を収集・分析する時間が増え、研究の幅は広がった。雪が降る地域での暮らしには、新鮮な感覚で溶け込んだ。もともとと焼酎を好んで飲んでいたが、岩手での楽しみを増やそうと、今は地酒をたしなむ日本酒党とのこと。

**まつもと ゆうじ**  
九州大学大学院の人間環境学府博士後期課程に学ぶ。博士(教育学)。高校の国語教員、国立鹿児島工業高等学校教授などを経て本学の共通教育センターへ。教育方法史・日本教育史・教育学が専門分野。担当科目は「教師論」「教育課程論」「教育原理」ほか。日本教育方法学会・全国地方教育史学会などに所属。



伝統的な農村景観を、  
どう後世へ遺すのか

自然との共生を語るフォーラム  
●9月1日／一関市・本寺中学校

一関市厳美町本寺地区。中世に開かれた荘園、その名残をとどめる風景が広がっています。かつて「骨寺村」と呼ばれていた山あいの一帯は、世界遺産登録への機運が高まる「平泉―浄土思想を基調とする文化的景観」の一つです。地域資源を後世へ守り伝えようと、住民や行政の協働が図られる地元で開催された「ピオトープ(自然復元フォーラム)inいわて2007」(主催NPO法人日本ピオトープ協会・近自然ネットワーク東北・岩手県立大学/実行委員長 総合政策学部教授・平塚



明)。「一関骨寺荘園に見る自然との共生」という今日的なテーマが関心を呼び、350名を超す参加者が本寺中学校に集まりました。

「世界に誇れる岩手の環境を指して(達増拓也・岩手県知事)、「骨寺村―伝統的な景観と生態系の貴重さ」(吉田敏弘・國學院大学文学部教授)、「気持ち良いランドシャフト(景観)を…住みやすさと生き延びやすさのために」(山脇正俊・スイス近自然学研究所代表)といった講演に続いて、パネルディスカッションへ。

伝統的な景観を残しつつ、稲作を主体とする農業振興を図る取り組みの難しさ。住民の合意形成を経て、地域力を結集する体験の大切さ。効率重視へと転換できない状況で農家経営を安定させる方法とは?。実情に即し、行政も弾力的で実効性に富む補助やサポートを展開すべきこと。さらに、身近な環境の生物多様性を認識するのが、これからの時代へ続く暮らしの端緒だ。このような点を巡り、地元代表の佐藤勲さん(本寺地区地域づくり推進協議会)と研究者が語り合いました。

次代への誓いも新たに  
開学10周年記念事業が動き出す

1998年4月の開学から10年の節目を迎えるに当たり、来年度開学10周年記念事業を実施します。学長、副学長ほか学生会代表、同窓会会長らがメンバーを務める実行委員会を設置し、記念のプロジェクトをリードしています。

今年度はプレイベントを実施。「開学10周年」をアピールする看板を正門に設置します。また、大学実行委員会が企画した「IPU Festa-Mode」を支援しており、岩手放送とタイアップしたテレビ番組「STYLE」は現在放送中です。なお、来年



「素心知因」と刻まれた開学記念碑＝揮毫/西澤潤一氏・初代学長

- 度事業の候補は次の通りです(抜粋)。
- 記念式典「6月19日」
- 記念フォーラム
- 記念植樹「植生再生景観計画の一環」
- 10年の歩みのとりまとめ
- さらに地域連携、教育・学生支援、学術振興などの観点からも企画が検討されています。

職場  
訪問

学部事務室の皆さん  
[総務財務室に所属]



笑顔と気づかい。頼れる知恵袋

看護・社会福祉・ソフトウェア情報・総合政策の4学部、そして盛岡短期大学の学部棟に事務室が設置されています。それぞれの持ち場場面、場面に応じた気づかいと臨機応変な対応に努める皆さんが集まってくださいました。

授業や実習に関する問い合わせ、備品の貸し出し、レポートや卒業研究の受け付け、といった窓口対応で日々、学生と接しています。もちろん、学部運営に関する手続き事項や規程は多岐にわたります。身近で頼れる知恵袋として、教員をアシストする役割にも意欲的です。

「まち」の未来図を巡る思考と実践。

総合政策学部／准教授 倉原 宗孝



くらはら むねたか

熊本大学工学部環境建設工学科を経て、同大学院自然科学研究科博士課程を修了。博士(学術)。北海道工業大学工学部建築工学科・環境デザイン学科で助教授を務めた後、2004年4月より本学へ。まちづくり、コミュニティデザインなどに関する多彩な研究・教育・社会活動に携わる。日本建築学会、日本都市計画学会などの会員。

都市計画・まちづくり・コミュニティデザインといったキーワードを通じ、倉原先生の世界へ近づこう。日常における幸せの実体も、捉えられるかもしれない。いかにしてハードを整備するか、という重厚な開発指向のスタンスではない。また、そこに生きる人の思いが最優先されるべきである。育まれてきた有形無形の資源を組み合わせ、在るべき社会の姿を創り上げていく。こうしたプロセスで重視されるのが、ソフトパワーを織り成すための住民意識の形成、その具現化を図る仕組みとアクションの方法論だ。

「地域に希望を灯す手立てを求め、という1点に私の関心は帰結します。もう時代にそぐわなくなった法体系や制度、しがらみ、固定観念など縛るものから、どれだけ自由でいられるかと発想の切り替えも必要でしょう。そういう意味で、子どもの目線は大切に活かすべきです。何が出てくるか分からない。ピュアで、大胆な意外性からも活路は開けます」

行動の中で耕す、という例えを倉原先生は用いた。アイデアを持続的に実践し、より望ましい方向へプロジェクトを導いていけば良い、と体験を促すメッセージである。参加と協働、まちなか・地域の再生と創造、社会教育・生涯学習としてのまちづくり。このように並ぶ研究テーマを深める際は現場に立つこと、その空気感から実体を伴うヒントが得られます。生きた学びを求め、学生と行動を共にする機会も多い。その土地のアイデンティティーに基づく自立モデルを、岩手でも確かめようと思



## じぶん時間

# 今、在ることが輝きた。

宮古短期大学部 経営情報学科 / 2年

## 伊藤 了太



### 自分で踏み出す道だから

進学先を決める頃、親は寛大に接してくれた。「どこで何を、どう勉強するかは了太の自由だよ」と。伊藤さんが生まれ育ったのは、愛知県刈谷市。大府高校のサッカー部では、ゴールキーパーで頑張った。ちなみに阪神タイガースの赤星憲広選手は、母校の先輩だ。

2年間、経済や経営をみっちり勉強したら英語圏でワーキングホリデーを過ごし、その先は家業(宝飾店)に就こう、というふうを考えてきた。つまり卒業したら即、就職という行路は選択肢に入っていない。将来へ向かう心の支え、生きる術、さらに人間としての根源的なパワーをトータルに養おうと欲する今、宮古での日々が持つ意味は、痛いほど自覚している。

### 「ひと」に恵まれる予感

国公立の短大で、志望に合う学校は少なかった。福島の会津、もしくは鹿児島へ行くことも検討した末、遠路はるばる訪れたオープンキャンパスの好印象で宮古短大に決めた。

高3の夏、はじめての東北に胸は躍った。盛岡で1泊し、国道106号線を走るバスに乗り込む。透き通った空気の区界高原。みどり深い山々は、早池峰山へも続く。さらに、まばゆく光を返す閉伊川。車窓を流れる景色にスケールと感動を覚え、やがて辿り着いた学舎で、伊藤さんはアットホームな雰囲気にもまれた。

「先生がた、職員の皆様、先輩となる在学生……。あの時、いろんな人と話せたのが良かったですね。あれこれ親切に教えてもらえたし、にじみ出る温かさが嬉しかった。だから、ここで学ぼう、という素直な気持ちで湧きました」

### 坂に佇んで何を思うか

通学に要する時間は、原動機つきバイクで2分にも満たない。ゆるい坂を上り切り、深い木立を抜けると、あっという間にキャンパスだ。

アパートへの帰り道だと、町の広がる様子が詳しく分かる。寄り添うように、眼下に立ち並ぶ家々。ところどころ、小さな畑が開けている。臨海の工場から立ち上る、白い煙。入り江に浮かぶ船も確かめられる。外洋へ向かって大きく横たわるのは、重茂半島だ。さらに海風が吹き込み、しよっぱい潮の匂いが漂うと、宮古に暮らす好ましい実感が高まっていく。

エンジンを止め、癒される景色に何度、見入ったことだろう。これからへの想いに灯を点す、あるいは迷いや不安を断とうとする時、伊藤さんは、その坂に佇んできた。内なる自分との静謐なる対話を通し、あるべき姿を探ろうと。



### 仕事観も深めよう

中小企業診断士の資格取得も視野に入れ、経営会計分野を中心に勉強を深めてきた伊藤さん。植田眞弘学部長の指導を受け、卒論では「日本の経営」にスポットを当てる。

雇用形態・人事制度・人材の育成と活用といったキーワードが起点だ。より今日的な情報を集めて経営手法の実践ふりと功罪、そして労働環境の特質を捉えようと構想している。自己実現、生きがいの創造という観点に立つなら、働く者の立場から事象を追って日本社会の現状を浮き彫りに、とテーマ意識は広がる。

「経営の論理の対極には、働く者の論理が存在すると思います。この2つの軸は相反するの、それとも調和の道を見出せるのか。そこが関心の拠りどころ。僕としては、さまざまな人材が抱くメンタルな要素も注視して現代の仕事論・幸福論という方向への展開を考えています」



### なにげない日常の大切さ

すこぶる日当たりの良い六畳ひと間、アパートの2階に住んでいる。ウグイスやカッコウの鳴き声で目覚める朝は、すがすがしい。夜になれば、またたく星また星を思うまま見上げられる。そういう喜びは、宮古に来て初めて知った。さらに、春が近づいても降り積もる雪。日常の場面一つ一つが、伊藤さんにとって愛おしい。

料理が大好きだ。自炊は、まったく苦にならない。おすそ分けで手に入れたマツタケ、寒ダラを調理した証拠写真を携帯電話のフォルダに保存してある。ふだんの食事だって、ときばき作る。凝り性なので、カレー料理のバリエーションも増えた。また「東北の米は美味い」と、しみじみ思う。好きな銘柄は、ひとめぼれ。



悠然として、時に語り掛けてくるような岩手山。その姿を望む広々とした場所に、キャンパスが誕生すると聞いた。理想郷としてのイーハトーブ・岩手が、そこに在る。はてなき大地を吹き過ぎる風も、リアルなイメージを結んだ。

ギターと一緒に歌おう

かれこれ10年ほど前。学生歌「風のモント」を手がける時、そんな想像を巡らせてみた。

むように…

の営みが、ずっと先の時代をも照らす普遍的の価値を育むように…

あの曲に託した想い

まつさらで、大きなキャンパスが思い浮かんだ。これから何かが描かれていく期待感。集う人すべての心は新しく、希望とエネルギーに満ちている。さまざまな知識の営みが、ずっと先の時代をも照らす普遍的の価値を育むように…



はじまりの心よ、色あせないで。

ミュージシャン

あんべ 光俊

※学生歌【風のモント】の作詞・作曲者

私としては、ギター伴奏の似合う曲調に仕上げたかった。明日への旅立ちを志向する清新なる言葉の連なりを、フォーク調のメロディラインに乗せてみた。いつか、音楽系のサークルなど学生の皆さんとジョイントしたいものである。

人格を陶冶する学風だ

ご縁とは不思議なものだ。思いもよらぬ場所で、何人かの卒業生と偶然に知り合う機会に恵まれてきた。営業の仕事をしていたり、マスコミやイベント関係に就いていたり、と社会でのポジションは人さまざま。おしなべて、いい顔をしている。人柄がにじみ出る、というのだろうか。素直さ、誠実さ、真面目さ、といった美徳を社会人になっても失っていないと察せられる。学生時代とは表現方法が違おうけれど、その人なりの輝きを放ち続ける姿に、共感と安堵感を覚える私である。

自律から逃げないで

生きていく上で、進歩を求めて変わることを恐れてはならない。だが、むざむざ大切なものを捨ててまで、自己の宇宙を作り変える必要もないだろう。だからこそ、自律の精神が求められる。

現役学生の皆さん、あなたのキャンパスライフは充実していますか。勉強の手ごたえを感じていますか。そして、これからへの希望は萌えていますか。道に迷ったり回り道したりするかもしれないけれど、人生を捉える場と機会を活かしながら、ためます歩んでください。

実践志向は強いよね

学問は、狭い次元で閉じてはならないと思う。もつともっと、野へ街へと分け入ろう。テキストや文献では味わえない、リアリティーに富む体験を追い求めよう。そのような目的意識を高め、持続的な学びを心がけてほしい。

在野の精神と交わる値打ち

私は、IPUの良きサポーターでありたい。たとえば、いろいろな人の志を集めて、岩手県立大学を支える会なるコミュニケーションを作り、大学との連携を強めるアイデアは、どうだろうか。教育・研究に活かせる情報やマンパワーは、さまざまな現場から無限に見出せるだろう。まさに、そこで起きていること。各界の実践者が考えていること、体現すること。そうした多様なテーマや事象を、鮮度の良いテキストとして募っていくのである。「大学にないものを外部から吸収する」という発想だ。これに賛同する人は、手弁当で駆け付けられたい。地域や世界との交流の輪が、どんどん広がっていくだろう。

まちづくりに活かそう、福祉の思考。

北上市 保健福祉部・児童家庭課  
佐藤 美和子さん 千田 慎平さん  
社会福祉学部 福祉経営学科 [平成19年3月卒]

「クライアントの真情に伝え、この私に、できることがある。そういう意思というか目的意識を、しっかり持ち続けたいものです。さまざまな問題を解決したり、より良く生きるための環境を整えたりする仕事の現場で、福祉的な思考を実践に活かしています」

佐藤さんの口調は柔らかかったが、福祉職に寄せる並々ならぬ意欲が伝わってきた。うなずきながら聞いていた千田さんは、まったく同感である。2人は福祉経営学科のクラスメートだった。ともに狭き門の採用試験を突破して、この春から市の福祉行政に携わっている。佐藤さんが生活保護係、千田さんは障害福祉係。それぞれのポジションで、新人らしからぬ仕事ぶりが信頼を集める。受給申請に関する窓口相談、デスクワーク、さらに対象世帯をフォローする外回りなどにエネルギー

を注ぐ佐藤さん。千田さんはスポーツ大会の企画・実施ほか、年間20件ほどの事業やイベントを担当している。応対に臨むカウンターで親切な説明に努めたり、デスクに戻ってテキパキ事務処理を進めたり、といった場面も。障害者の自立・社会参加をサポートする現場で、ベストを尽くす毎日だ。

ふだんの動きや出来事、そして手ごたえも苦労話も、フランクに話せるのが嬉しい。大学時代から今まで、いろいろ共通項の多い者同士。わかり合えることが多いだろう。佐藤さんは奥州市前沢区の出身で、千田さんは北上市にUターン。地域に根ざし、どのようにして福祉を創造していくか、という意識の高まりを自覚するようになった。「まちづくりを支える、さまざまな分野との有機的な連携が大切です」と、2人の視点は広がりを見せている。



業界の風を感じて、ステップアップ。

北日本銀行 本町支店・業務グループ  
齊藤 依子さん  
盛岡短期大学部 国際文化学科 [平成18年3月卒]



出勤前のひと時、自宅で。あるいは通勤のバスに揺られながら。経済紙の見出しを追ったり、気になる記事を読み込んだりする齊藤さんがいる。「社会人になってから、紙面チェックの時間が一日の流れに組み込まれました。それは、銀行員として成長していくための必須メニューです。学生の頃、こういう自分の姿は、まったく予想でできませんでしたが…」

株価、為替相場、金融政策、企業活動のトピックス、さらに地域の話題、グローバルな動向など。ふだんの暮らしとも、きわめて結びつきの強い「経済」への関心は深まるばかりだ。かくして仕込んだネタは、始業前のミーティングで披露される。

各人各様の視点でチェックした内容に、短いコメントを添えるよう求められる。限られた時間でポ

イントを整理して話すのは難しいがそれも勉強だ。「お客様への情報提供を充実させる、提案内容に厚みを持たせて金融商品のセールスに役立てる、というふうには絶えず応用レベルを意識しています。つまり戦力の一員として、存在感を高めていきたい」

入行当初は出納係。現在は、ジョブローテーションの二環として窓口業務を受け持つ齊藤さん。街とともに歩む地元商店や事業所、そして長らく住んでいる年配の方などと話す機会も多く、こまやかな気づき、あたたかな接客に努める毎日だ。本人の言葉だと「この業界で生きていく知識を得るために」、投資信託・証券・生命保険など、多様化する金融商品に関する勉強が熱を帯びてきた。資格取得が、業務に就く条件とされるケースも多い。銀行が打ち出すビジョンと呼応し、現場で自立的なステップアップを図る気概が頼もしい。